

男色

杯には、女形多く入用なる時、此野郎を雇ひ女形に遣ふなり、其時野郎振袖を著し、編笠をかぶり、樂屋入する、天明の始まで有しと云。○中略

芝神明前にかげまや三四軒あり、八町堀にも二三軒あれども、家造庵末にして、男女出逢の貸座敷にもすると云、又湯島天神社内にも有て、芳町に同じ。

〔和漢三才圖會十人倫之用〕男色○中略俗云衆道

按、男色甚者勝、女色而不耐久也、若筍之甘美、纔過一句、則膚硬節高、不可噉也、韓非說難云、衛彌子瑕與君遊于果園、食桃而甘、不盡以半啗君、君曰、愛我哉、忘其口味、以啖寡人、及彌子瑕色衰愛弛、得罪於君、君曰、是嘗啖我以餘桃也。

〔倭訓栞加中編四〕かはつるみ 太秦牛祭文、宇治拾遺等に見えたり、男色の事也といへり、かはやつるみの義成べし、了意が犬はりこに、亂世に盛なりし事をいひて、股をさき肘を引て血を出し、志の實なる事をあらはす、古き歌に、

おもふ心色には見えず身をさしてあけのちしを、君それとしれ、忠孝をわすれ非道の色に身を捨命を失ふもの、僧俗にわたりて女色よりも甚しと見えたり、

〔嬉遊笑覽附錄〕かはつるみの事を、漢土には放手銃といふ、笑林廣記にその詩を載たり、もと、姓倪なる人を嘲りたる詩となむ、をかしく作りたり、

〔宇治拾遺物語〕「これも今はむかし、京極の源大納言雅俊といふ人おはしけり、佛事をせられけるに、佛前にて、僧に鐘をうたせて、一生不犯なるをえらびて、講を行なはれけるに、ある僧の禮盤にのぼりて、すこしかほ氣しきたがひたるやうに成て、鐘木をとりてふりまはして、うちもやらで、まばしばかりありければ、大納言、いかにと思はれけるほどに、や、ひさしく物もいはでありければ、人どもおぼつかなく思けるほどに、この僧わな、きたるころにて、かはつるみはいか、